



普通高等教育“十一五”国家级规划教材
新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

总主编 谭晶华

日本文化史教程

顾伟坤 编著



上海外语教育出版社
外教社 SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS



普通高等教育“十一五”国家级规划教材
新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

总主编 谭晶华

日本文化史教程

顾伟坤 编著



图书在版编目(CIP)数据

日本文化史教程 / 顾伟坤编著. — 上海: 上海外语教育出版社, 2008

(新世纪高等学校日语专业本科生系列教材)

ISBN 978-7-5446-1117-6

I. 日… II. 顾… III. 文化史—日本—高等学校—教材
IV. K313.03

中国版本图书馆CIP数据核字(2008)第176122号

出版发行: 上海外语教育出版社

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机)

电子邮箱: bookinfo@sflep.com.cn

网 址: <http://www.sflep.com.cn> <http://www.sflep.com>

责任编辑: 曹 艺

印 刷: 上海叶大印务发展有限公司

经 销: 新华书店上海发行所

开 本: 890×1240 1/32 印张 10.375 插页 8 字数 303千字

版 次: 2008年12月第1版 2008年12月第1次印刷

印 数: 3 100 册

书 号: ISBN 978-7-5446-1117-6 / K · 0023

定 价: 20.00 元

本版图书如有印装质量问题,可向本社调换

前 言

《日本文化史教程》为日语专业“日本文化”课程所用教材,在上海外国语大学日语专业本科生、网络学院本科生中使用多年,获得较好的效果,得到广大师生的认可。

本教程按照日语专业课程设置的特点及课时安排,设计为十五讲,供一个学期使用。基本框架按日本历史发展的顺序,从日本文化的发端、嬗变的历史轨迹来叙述其概貌。内容为十五个专题:日本文化的曙光;民族文化的形成;佛教的传入与大陆文化的传播;律令制度的成立与其文化;贵族社会与国风文化;公家文化与武家文化;新佛教的成立与文学、美术;动乱期的文化发展;桃山文化与艺能的大众化;儒学的日本化与诸科学的发展;学问的新动向;町人文化与其思想;西欧思想的吸收与近代精神;近代教育与文学;近代日本人的精神构造与文学。本教程的每一讲独立成章,但又互相联系。内容上以介绍为主,既吸收前人及当代研究成果又保持笔者自己的见解。文字力求浅显、生动。

本教程的特点:1. 具有较强的系统性和实用性,结构合理,重点突出,讲求知识的相对稳定性;2. 采用学术讲座的风格,有讲的现场感,亲切、有趣,适合教学;3. 教程的每一讲均由课文内容、注释、词汇表、相关知识、思考题构成,能激发读者的学习兴趣和思考;4. 本教程

的后五讲内容详尽介绍了日本近代的文化特点,以利于读者更深入地了解日本社会、日本人的思维方式。

衷心希望本教程能提高广大读者对日本文化的兴趣,增加日本文化历史知识,开阔视野,提高修养,更好地掌握和运用日语语言知识,使综合性的文化史所提供的知识联结多种学科,形成知识网络,在纵向和横向联系中开拓比较研究的思路。

本教程在编写过程中,承蒙日籍华裔企业家、文人、诗人、清华大学“一二·九奖学金”、中国科技大学“张宗植奖学金”设立者——张宗植先生的关照(1914~2004),将自己珍藏的书籍寄来供我参考,其秘书小出栗女士也热心为我收集了许多珍贵资料,并使我得以顺利地完成此教程的编写。书稿付梓,以慰张宗植先生在天之灵。

承蒙上海外国语大学日本文化经济学院领导的热情鼓励和上海外语教育出版社领导及日语编辑的关心和支持,本教程由上海外语教育出版社纳入“新世纪高等学校日语专业本科生系列教材”之中出版,本人深感荣幸。在此表示衷心的感谢。

上海外国语大学日本文化经济学院 顾伟坤

2008年9月

目 録

前言

第一講 日本文化の曙光

1

- 一、日本文化形成の環境とその特徴
- 二、日本の民族文化と外来文化
- 三、日本列島と日本民族
- 四、階級と国家の形成

関連知識

更新世と完新世
森林
貝塚

第二講 民族文化の形成

23

- 一、古墳文化
- 二、原始宗教の出現
- 三、民族文化の形成

関連知識

墳丘墓
大王と天皇
倭と日本人

第三講 仏教の受容と大陸文化の伝播

43

- 一、仏教とその伝播

- 二、仏教の日本への公伝
- 三、聖徳太子と中国文化の受容
- 四、学問の伝播

関連知識

寺院

聖徳太子と陰陽五行説

第四講 律令制度の成立とその文化

63

- 一、大化改新と中国制度の模倣
- 二、律令の制定と大学の制度
- 三、大陸文化の移植と新文化の展開

関連知識

律令制

奈良

京都

第五講 貴族社会と国風文化

85

- 一、王朝文化
- 二、院政と武士の発生
- 三、平安仏教の特色

関連知識

律令貴族の年収

武士

第六講 公家と武家文化

105

- 一、鎌倉時代の文化
- 二、公家文化の特徴
- 三、武家文化の確立
- 四、武家と禅宗

関連知識

家の形成と莊園村落
さむらい・もののふ
上皇・法皇・院

第七講 新仏教の成立と文学、美術

122

- 一、鎌倉仏教の歴史的意義
- 二、仏教の民間への普及
- 三、鎌倉時代の文学、美術

関連知識

神道
神話

第八講 動乱期における文化の進展

143

- 一、動乱期の政治と社会
- 二、動乱期の文化
- 三、動乱期の文化普及

関連知識

鉄砲の日本伝来
城

第九講 桃山文化と芸能の大衆化

165

- 一、桃山文化の特色
- 二、侘び茶の完成と芸能の成熟
- 三、乱世文学の特徴

関連知識

一揆
倭寇とばはん

第十講 儒学の日本化と諸科学の展開

184

- 一、近世社会と儒学
- 二、朱子学と陽明学
- 三、諸科学の展開

関連知識

朱印船
趣味

第十一講 学問の新しい動向

203

- 一、国学の展開
- 二、蘭学の事始め
- 三、多彩な経世論

関連知識

南蛮人と紅毛人
キリシタン・バテレン

第十二講 町人文化とその思想

219

- 一、元禄文化とその社会背景
- 二、町人学問とその思想
- 三、近世文学の成立
- 四、化政時代の文化

関連知識

江戸
町人
赤穂事件

第十三講 西欧思想の摂取と近代精神

238

- 一、西欧接触とお雇い外国人
- 二、文明開化と西洋思想

三、「明六社」の啓蒙思想

関連知識

黒船

長崎

第十四講 近代における教育と文学

260

一、近代教育の事始め

二、小学と大学

三、教育思想の変貌

四、近代文学の黎明

関連知識

開国時の混乱

教育

第十五講 近代における日本人の精神構造と文学

276

一、明治民法の思想

二、家制立憲国家の理念

三、反体制的知識人

四、近代文学の出発

関連知識

民法

明治維新と神仏分離

廃刀令と徴兵制度の成立

注釈索引

295

単語索引

301

日本文化史略年表

318

参考書目

322

第一講 日本文化の曙光

一、日本文化形成の環境とその特徴

すべての民族文化の発生と発展はその依存する自然環境によるものである。地域の自然環境によってそれぞれの異なる文化ジャンルを育んでくることは言うまでもない。

日本は、ユーラシア大陸の東端、太平洋上に浮かぶ弧状の列島にできたため、ほかの民族と異なるものができたのである。日本の国土は北は北緯 45 度の北海道から、南は北緯 25 度の沖縄まで、長さにして約 3000km、気候も景観も、様々に違うこの国土が、日本文化の形成に重要な役割を果たしたのである。

気候の上では、日本列島はモンスーン地帯に属するが、同じモンスーン地帯でも、南アジアの場合は、高温多湿の夏の雨期と、冬の乾期とが交替する形をとるのに対し、日本では、年間の降雨量が多いばかりではなく、夏にも冬にも雨(または雪)が降り、森の生育に適していたとともに、その森の木の实など、豊かな食料が供給された。縄文土器は、ドングリなど木の实に熱を加えて、アク抜きをし、また山菜や川魚あるいは動物の肉を煮て、食用に供するために使用され始めたと考えられている。やがてこれに海の資源が加わる。森の中で土器を使用していた人々が、海岸に近い所に出て魚

や貝などを食用にするようになったのは、その生活廃棄物の遺跡である貝塚の残存状況から、ほぼ一万年以前と推測され、「森と海の文化」としての縄文時代は、このころから始まったとされるのである。

森と言っても、日本列島の多様な自然環境に対応して、必ずしも一様ではなかったが、ほぼ五千年前のころから、本州の中部地方を境にして、関東・東北地方にかけてのブナ・ナラなどの落葉広葉樹林帯と、九州地方にかけてのカシ・シイなどの常緑広葉樹林帯（いわゆる照葉樹林帯）とが形成され、現代までほぼそれが続いている。このうち、東日本の森林帯の方が、木の実の種類や量が豊富であったようで、縄文文化の遺跡がこの地域に多いのも、そのためと考えられる。とくに青森県の、三内丸山遺跡^①は、約五千五百年前から四千年前まで、千五百年間にわたって人々が住みつづけた所であり、当時は海岸線も近く、いわば森と海との接点に位置していた。農耕以前の採取経済の段階で、長期間の定住に近い生活形態がみられるのは、日本列島以外の原始社会では異例であり、周囲の地域の生活条件に、いかに恵まれていたかがうかがわれるようである。

日本は四面海でかこまれているということは、どこからでも、この国土に進入できるということである。外来文化や民族の流入ルートは、一つでなく複数である。そのためにルーツを異にする多様な文化がミックスされる。

そして、ユーラシア大陸の東端から落ちこぼれたところにあるだけに、北から、西から、南から、いくつかのルートで入ってきた文化は、これから先、出て行くところがない。そのために次々と蓄えられていく。早く入った文化も、遅く入ってきたものも、いっしょに生きているのである。各時期に入ってきた文化はこの島国に共

存して自国の独特な融合文化が形成されたのである。

日本文化の環境として特別にあげておきたいのは中国との関係である。日本列島の西側には、高度な文化を発達させた中国があり、先史時代の太古から、すでにいろいろな影響を受けていた。それは地理的に中国文化圏と最も親しい関係位置にあることはいうまでもない。中国人は古来自分の住むところを中華とし、その周囲に東夷・南蛮・西戎・北狄といういくつかの周辺文化圏を考えた。インド人はその北にそびえるヒマラヤ山を想念化して須弥山^⑧とし、それをめぐって東西南北に四大洲があることを想定した。チグリス・ユーフラテス川の流域は古くバビロニア・アッシリヤ等の文明国が開け、やがてそれがペルシャによって統一され、ギリシャに対抗する勢力となった後は、それほど大きな勢力とはならないが、それでもイスラム教を中心とする大きな文化圏がその間から成立したことによって、十分にインドと中国とに対抗することができる。

古代中国人は日本を東夷の中に数え、歴代の史書では東夷伝の中にその記事を収めている。それはもともと日本人があずかり知らないところであるが、中国人は日本をその天下構成の一要素として取り扱っていたようである。日本文化発達の過程をみると確かにそうしたところもあった。したがって日本にとっても、もっとも重要なのは、この中国を中心として発達した文化圏の歴史とその性格と、そして構造とである。

二、日本の民族文化と外来文化

北ヨーロッパの諸民族は常に二つの遺産を意識してきた。古ゲルマンのルーツと古代ギリシャ・ローマの文化遺産である。実は日

本人も同様に二つの遺産を受けついでいるのである。一つは古代日本の土着の文化であり、もう一つはより高度な中国の文明である。地理環境から見れば、日本文化の形成は中国発達文化の伝播の中で次第に形成されたのである。従って、日本文化史は一つの外來文化の摂取、発展の歴史だと言えよう。絶え間なく日本に伝播された外來文化は中国隋・唐の文化、宋の文化、元・明の文化、南蛮文化、清の文化、欧米の文化の摂取が、文化史を画する峰を形成している。

日本人は、漢字を用い、漢語と漢文によって、思考と記述をしながらも、日本に固有の文化があると主張した。東アジアの文化圏の中では、中国の文化が普遍的な価値を持つと考えられ、さらに、仏教も普遍的な教えであると思われていたから、日本に固有の文化があると主張するためには、日本の特殊性を強調することになろう。固有で、特殊な日本文化を捉えるために、日本人は一貫して、日本文化の中にある外來文化を明確にし、それを取り除いて行くと、固有な文化が見えてくるに違いないと考え続けた。そうした思考は、早く『古事記』や『日本書紀』の中でも顕著に現れており、後にその方向を突き詰めたのが国学であった。外來文化の中核をなしているのは、儒教文化と仏教文化であったから、儒教と仏教に対抗して、神祇信仰に基づく神道文化を立て、儒教と仏教と神道の三つの関係、組み合わせの変化で日本文化史を説明しようとすることになる。外來文化の外皮を剥がして行くことによって、日本の固有文化を明らかにすることができると考えた国学者は、儒教的なものを取り除き、仏教的なものを排除することに力を注いだ。その中で稲作を中心として形成された文化を、日本固有の文化であると考えた。しかし、歴史学、考古学の研究が進むにつれて、稲作や青銅器・鉄器文化の伝播が解明されはじめると、それも外來

文化であることが明らかになってきた。外来文化を取り除いて固有文化に遡ろうとする伝統的な志向は、現在では日本人の関心を縄文時代に向かわせている。

普遍と特殊、外来と固有という視点で日本文化を見ることは、日本文化の解体をどこまでも続けて行くことになるわけで、研究の進展とともに、問題が複雑になるばかりなので、近年は、外来文化と基層文化といういい方が一般になった。不断に外来文化を摂取することによって形成されてきた日本文化は、それぞれの時代に前の時代までの文化を基盤として新しい文化を摂取したわけで、重層的な構造を持つ基層文化を、神祇信仰や神道思想だけで考える視点は、有効ではないと考えられるようになった。

三、日本列島と日本民族

人間が日本へ最初にやってきた時代と思われる洪積世^③の時代には、日本列島は大陸と地続きであったり、離れたりしていた。当時は氷河時代ともいわれ、寒い氷河期四回と、その間の温暖な間氷期とが交互に繰り返される気候であったが、氷期には大量の水が内陸に氷結されるため、海水面が下降し、日本列島は大陸と結合するようになる。反対に間氷期^④には、氷の溶解により海進現象がおこり、日本列島は孤島となった。

この陸続きの時期に、大陸から動物や人間が日本へ進入してくることはできたわけである。当時、中国の草原に住んでいたナウマンゾウ^⑤が日本にやってきて、一万年、氷河時代終期までいたことが、野尻湖の発掘によって知られている。

そこで、人類が初めて日本列島に進入してきたのはいつごろであろうか。それは、海退により陸橋^⑥が存在した氷河期でなければ

ならない。湊正雄氏らの研究によると、最後の氷河期(ウルム氷期^⑦)には三回の亜氷期があるが、そのとき、本州・九州・四国は朝鮮半島と陸続きであったし、北海道は本州と離れてはいたが、厚い氷原におおわれて、大陸との交通は可能であった。そして、日本列島が大陸から切り離された最後の時期は一万七、八千年前である。したがって、人類が日本へ初進入したのはそれ以前ということになろう。

旧石器時代人は、すでに洪積世の中期には中国華北の周口店まで達していた。そしてアメリカの新大陸へ人類がはいったのは洪積世晩期である。それはシベリアから、サハリン、カムチャツカ半島、アラスカというコース(コリャーク回廊)を通ってはいったと思われるが、日本はこのコリャーク回廊に接しており、このアメリカへ進入する洪積世人の一部が北海道へはいってきたのではないかとみられている。

1. 縄文文化人の生活

アメリカの学者 E・S・モースによる1877年の東京都大森貝塚の発掘調査が近代科学としての日本考古学の幕開けであり、縄文時代研究の開始でもあった。モースは土器の文様を記述する際に cord mark という語を使い、それが縄文と訳され、縄文土器という言葉が生まれた。しかし縄文は、古墳時代まで用いられた地域があり、地域・時代によって用いられない場合があるので、縄文のついた土器をもって縄文時代とすることはできない。ただし、それらは系統がつながる土器群と見られている。ここでは日本列島に約一万二千年前に土器が出現し、水稻農耕が約二千五百年前に成立するまでを縄文時代とする。ただし、土器出現期を縄文時代から外す考えもある。大森貝塚^⑧の調査以降、土器の研究が進み、世

界に類を見ない詳細な土器型式編年網が確立し、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期に大別された。

縄文人は日本の旧石器人の系統をひくものである。しかし、早・前期は華奢で、中期にはがっしりとした体形となり、そして東アジアの中で個性的な形質を獲得した。現代人より彫りの深い顔立ちで、頑丈な体であった。人口は、草創期からしだいに増加し、中期になってピークに達する。しかし、後期以降減少する。地域的には、西日本では人口ははるかに少なく、ピークも後期にある。形質や人口の変化は、動植物資源の変化と分布の違いなどに関連している。この縄文人の人口密度は現在の狩猟・採集民と比べてもきわめて高く、ここにも縄文文化の特殊性がある。

草創期にはある程度の遊動はあったが、海岸部や河川流域を中心として少しずつ定住化が進み、早期では大型集落が見られるようになる。前期になると10mを超える大型住居を含む大規模集落が出現し、食料を備蓄する貯蔵穴も一般的に付設され、中期では100棟以上の住居で構成される環状・馬蹄形の集落がよく見られるようになる。しかし同時期に営まれた住居は発見数に比べてはるかに少ない。後期になると、集落数・規模が小さくなる。住居として竪穴住居のほかに掘立柱建物が建てられていた。集落の内側には墓域が設けられ、周辺には貯蔵穴などが作られた。また、墓域は集落外に設けられ、東北・北海道では環状列石や周堤墓が作られた。氏族のような社会組織が生まれた。しかし、このような特徴は主に東日本に見られるもので、西日本の集落構成は貧弱であった。

狩猟・採集・漁労によって食料を獲得していた。狩猟では、弓矢・槍などのほかに落とし穴などの罠も使われ、漁労でも鉛・釣り針などのほかに網が用いられた。クリやアク抜きを必要とするトチ・ドングリ類などの植物もかなり利用されていた。現代人が食する動